

高等学校の柔道授業における映像教材の活用

学籍番号 249351

氏 名 堀田 孝起

主指導教員 石川 美久

副指導教員 平井 美幸

1. 背景

1.1 実習校の実態と課題設定

実習校である大阪府内の〇高等学校では、保健体育科の授業において ICT や映像教材の活用が積極的に行われておらず、柔道授業も教員の口頭説明とその場での実演を中心に進められていた。一方、投げ技は「崩し・作り・掛け」の連動による多様な身体の動きから成り、一瞬で動きが終わるため、実演と説明だけでは理解が追いつかない生徒が一定数みられ、技能習得が十分でない実態があった。また、柔道場は狭く、多人数が同時に活動するため、1人1台端末の出し入れや置き場所の確保は事故や故障、運動量低下につながる懸念がある。そこで本研究では、プロジェクターで投影し、スローモーションや文字情報を含む映像教材を授業内で繰り返し視聴できる形で活用することにした。

1.2 研究目的

本教育実践研究の目的は、高等学校の柔道授業において、投げ技学習における映像教材の活用が、生徒の技能習得（技の理解・実施に関わる意識）および柔道に対するイメージに与える影響を明らかにすることである。あわせて、自由記述を用いて、生徒がどのような学びや気づき（安全・受け身・礼儀など）を言語化しているかを検討し、映像教材を授業デザインに位置付ける意義を考察する。

2. 研究方法

2.1 対象と授業実践

対象は大阪府内〇高等学校2年生男子8クラス149名（欠席者除く）である。授業は令和7年5月から7月にかけて全8時間（週1回）実施し、前半4時間は寝技を学校教員が指導した。後半4時間では、1年次に受け身などを学習済みであることを踏まえ、投げ技「支え釣り込み足」「大腰」を題材として、映像教材と実技を組み合わせた授業を行った。

2.2 映像教材の内容と活用方法

映像教材は学習指導要領解説や指導資料、柔道授業ガイドに基づき、実習校の実態に即して作成した。正面・側面から撮影した模範動作に加え、スローモーション、再生停止、文字情報（技のポイント）を挿入し、「取り」の動作ポイントと「受け」の安全な受け身のポイントを可視化した毎時間、体調確認と受け身練習を行い、活動場所・人数配置を調整して衝突等の事故防止を図った。

2.3 調査と分析

単元の前後で質問紙調査を行い、柔道のイメージ（8項目、5件法）および技能に関わる項目（18項目、5件法）を測定した。さらに単元後には、映像教材の理解・評価（4項目）と自由記述式アンケートを実施した。アンケートデータはSPSS（有意水準5%未満）で授業前後のアンケート結果に対してt検定を行い、自由記述式アンケートはKH Coder3で形態素解析後、共起ネットワークを作成した（最小出現数8回、Jaccard係数0.2以上）。

3. 結果

3.1 質問紙調査の結果

柔道に対するイメージは、「柔道は危険である」「柔道は怪我が多い」「柔道は苦しい」の3項目で有意に低下し（ $p<0.05$ ）、否定的イメージが軽減した。「柔道は怖い」も低下傾向を示した（ $p=0.051$ ）。また、技能理解に関わる項目では、「技に入る順番が分かった」「相手の重心を感じることができた」などが向上し、映像による動作の可視化が学習を支えた可能性が示唆された。一方、情意面（楽しさ・爽快感など）には大きな変化がみられない項目もあり、映像教材のみでは情意面に直接作用しにくいことが示唆された。

3.2 自由記述・共起ネットワークの結果

自由記述式アンケートの共起ネットワークでは、「相手」「技」「投げる」を中心とする大きな語のまとまりが形成され、そのグループに「柔道」「受け身」「楽しい」「感じる」「学ぶ」「力」「授業」などが共起していた。また「学ぶ」と「礼儀」が結び付くなど、技能学習の文脈で礼儀の気付きが語られていた。そのほか、「映像」「ポイント」「重要」、「自分」「動き」「足」、「体」「使う」「考える」など、映像教材を手がかりとした動作理解に関する語のまとまりが確認された。一方で、「スポーツ」「怪我」「多い」、「怖い」「イメージ」、「危険」「先生」など、柔道の危険性に関する語も小さなまとまりとして現れており、授業後も安全に対する意識が言語化されていた。

4. 考察

本研究の結果から、投げ技の学習において映像教材を活用することは、生徒の否定的イメージを軽減し、技の手順やポイントの理解を促す上で有効であることが示された。映像によって一瞬の動きを繰り返し確認できること、文字情報やスローモーションにより着目点が明確になることは、教員の実演・口頭説明を補完し、多人数授業でも学習の見通しを保障しやすい。さらに、映像教材を手がかりに生徒同士がタイミングや体の使い方を教え合う様子もみられ、主体的・対話的な学びが促進されたと考えられる。一方で、情意面の向上には、成功体験を味わえる課題設定や、柔道の楽しさを実感できる活動・振り返りの工夫を組み合わせる必要がある。

5. 結論

高等学校の柔道授業において、投げ技学習に映像教材を取り入れることは、生徒の柔道に対する否定的イメージの軽減と、技の理解・習得の促進に寄与する可能性が高い。映像教材は、取りと受け身の双方の動作の理解を支え、学習者の心理的安心感の形成にもつながる手立てとなりうる。今後は、授業展開との組合せや、映像教材の提示内容・提示場面を工夫し、柔道専門外の教員でも安全で効果的な投げ技の学習を進められる教材づくりに取り組む。